

日本 ハンザキ研究所ニュース 2008(8) : 通巻 No. 31



発行2008年7月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

賀茂川ハンザキ

京都の賀茂川に変なハンザキがいるという噂はかなり前からあった。牧野さんと言う方が一人で観察していて、どうもおかしいということで姫路市立水族館にやって来た。私は中国ハンザキに関する知識は持っていなかったし、京都なら京都大学に松井先生がおられるので指導を受けるようにアドバイスをした。それから何年が過ぎたのだろうか、この度外来生物として私の前に出現したのである。京都大学の調査が行われると数匹から十数匹の変なハンザキが見つかるという。外来生物を見過ごすことができないと大学に收容したが、本格的な飼育設備が無く気温の上昇もあって低水温の維持ができなくなり死亡が続いたということで、当所への受け入れが打診された。私としても外来生物を野放しにしておくことはできませんし、大学で次々と死亡していくという話を聞いては放置できません。

気温が上昇し水温が高くなるとハンザキ類は生きて行けません。9日に松井教授自らが6個体の賀茂川ハンザキを運んできました。典型的な中国ハンザキの斑紋（黒褐色の地色に大きく淡色の模様）を見せる個体もありますが、ほとんどが赤褐色の地色にゴマ斑模様と言う日本産の種とは雰囲気異なる個体が多くみられました。飼育場に放されたとたんに鉢合わせした個体同士ががっぷりと咬みあいになったのです。中国産は気が荒いと言う今までの経験どおりの光景でした。收容した翌日の朝には4個体が隣の水槽に移動していました。日本のハンザキが乗り越えることができない壁を悠々と越えていったと言うことです。また、ハンザキの餌に養魚場からアマゴやニジマスを入れていますが、当初は次々と食われていくものの、やがて学習した魚類は食われなくなり、餌をたっぷり食べて大きくなっていきます。こうなるとハンザキには捕食することができないのですが、これを中国産の方へ移すと、口の左右に頭と尾が見えるような状況で捕食していきます。明らかに日本産のハンザキよりも生活力が勝っているようです。

こんな外来動物が京都の賀茂川で繁殖しており交雑個体も確認されているのだそうです。日本産の危機です。では、なぜこんなことが起ったのでしょうか？ それは今から30数年前に日中の国交が回復されました。その機を逃さずに中国ハンザキを輸入した人物がいたのです。日本産は特別天然記念物ですが、中国産なら食えると言うことで1ト、800個体ほどを輸入したそうです。「食ってみんさい」と言うタイトルで報道もされました。しかし、

日本産と区別のつきにくい中国ハンザキを食用にするとほとんどないことだとマスコミから批判されました。京都の料亭では外聞をはばかってこっそり賀茂川へ捨てたのだらうと推測されています。日本の各地でも中国産個体の発見は知られていますが、繁殖の確認はありません。複数の個体がまとまって野外に放逐されなければ、繁殖まではそう簡単には行かないでしょう。

収容を依頼されても次々と捕獲されていくとなると当方でも当然ながら限界があります。松井先生は賀茂川では典型的な日本産のハンザキを見つけることが困難な状況で、全ての個体が中国産か交雑個体かもしれないとコメントされています。日本産のハンザキについては文化庁が所管であり、外来生物に関しては環境省です。この問題は放置できることではないので早急に対策が求められます。最悪の場合には全面的な駆除と言うことになりませんが、これまた難題です。和歌山県におけるタイワンザルとニホンザルとの交雑問題でも動物愛護の立場の人から駆除に対する批判が起りました。サルが可愛そうだと言う意見なのですが、誰がいけないのでしょうか？ 無責任な人間が悪いのは明らかなのですが、放置すれば日本産のハンザキやサルが消えてしまうことになるのです。皆さんはいかがお考えでしょうか？ 悪いことをした人間が心の痛みを感じつつ駆除に踏み切るしかないのではないかと思います。中国産が可愛そうだと言う意見も当然ながら出るでしょうが、それなら放置しておいて日本のハンザキは可哀想ではないのでしょうか？

今から 20 数年前に大阪税関でワシントン条約違反の中国ハンザキが収容され、緊急保護を依頼された姫路市立水族館へ運ばれてきました。30 ㎝前後の幼体 20 個体です。台湾旅行から自分で飼育するために購入してきたと言いながら隠して通関しようとしたところから、明らかに違反を承知の上の犯罪です。未成年者のこの人物の後ろには明らかなペット業者の姿が見えてきます。犯罪と書きましたが実はそうではなくて税関で発見されても所有権放棄でおしまいと言うザル法なのです。また、台湾には中国ハンザキは棲息していないことになっていますので、これまた中国からの密輸ルートの存在が考えられます。

姫路市立水族館では中国科学院に送り返すことを打診したのですが、台湾からの中国ハンザキの本当の産地が不明なので受け取れないと答えてきました。仕方なく飼育を続けましたが、成長に伴い水槽も狭くなり互いに咬み合っては大怪我をしたり死んでしまったりします。8 個体まで減ったところで半数を国内移動の許可を得て広島市安佐動物公園に引き取っていただきました。その後姫路も広島も 1 個体だけが生き残り、姫路の個体は 1 メートルを越す大きさになって生きています。広島の方では以前に賀茂川から収容した 20 ㎝の大物と姫路からの 10 ㎝の 2 個体が盗難にあつて姿を消してしまいました。

結局、ワシントン条約があっても生き物を救うことには直接つながらなかったということです。人間の勝手な欲望の結果が野生の希少な貴重な生物の絶滅に拍車をかけていることになります。今回の賀茂川ハンザキの処理はどうなっていくのでしょうか？中国では野生のものが闇取引されて数を減らしているそうです。食用に養殖も始まっているとのことですが、暗雲漂う中国産の将来です。

オオサンショウウオの健康診断

生野ダムの下流で行われている河川の付け替え工事中に救出され、研究所内の保護センターで飼育されている 65 匹のハンザキを毎月 1 回全てを取り出して健康診断を実施します。多数飼育で一個体ずつに餌を与えることができません。センターのプールを改造した水槽では餌としてアマゴやニジマス泳がせています。養魚場から運ばれてきた当初は次々とハンザキに食われていきます。しかし、その内に魚の方も学習してハンザキに近づかなくなり食われにくくなっていきます。こうなると餌がとれずにやせてくるハンザキが出てきますので、健康診断をしながら管理していくのです。ひどくやせた個体は隔離して餌を与えます。

水質検査をした後水槽の水を抜きながら 1 匹ずつ取り上げてマイクロチップで個体を確認しつつ測定していきます。65 個体全てをチェックするには 4 人でほぼ 1 日かかります。体重の減少や負傷の有無、怪我の治り具合などを見ながら、そろそろ繁殖期に近づいてきたので、オスのお尻の孔の周辺が隆起している程度なども確認します。水槽内の清掃や巣穴の整備などをしておき、チェックの終了した個体を順次戻していきます。作業は単純なのですがなかなかの重労働ですし、暖かい季節はいいのですが冬の寒さの中での作業はさらに大変です。昨年度は県から受託した会社のメンバーが全面的に行っていましたので、見物していればよかったのですが、今回からは NPO 法人(認証申請中)として直接測定などの作業を受けましたのも法人が存続できるように財源の確保のためです。地域へも現金収入が多少でもあればということと、できるだけ多くの地元の方にかかわっていただきたいという考えで、毎回 1 人参加してもらっています。

今月がはじめての作業で、手間取りましたが何とか全頭の無事を確認し、夕方までには終了しました。と言っても NPO のメンバーが 3 人もボランティアで加わったことですので、作業の大変さが分かっていたかと思えます。時々水槽から脱走していてサイズ別に収容しているのですが、別の区画に戻されていたりすることもあり、個体識別用のマイクロチップの存在は大切です。しかし、毎月のこの作業はハンザキにとってはどんな影響があるのでしょうか？ あんまり頻繁に触るのはいけないのでは？とかそんなに神経質な動物ではないので問題ないのではないかと色々な思いがあります。

月 1 回の健康診断は今回のケースが初めてであり、養父の建屋川や豊岡の出石川の場合には 2~3 ヶ月ごとに行っていましたが、回復が難しいほど痩せてしまった個体だったので今回のやり方が結果としてよければ今後ともこの方式になることでしょう。何しろ 3 年前後の捕獲収容飼育では長い時間の健康管理がうまくいけばより多くの個体を元の河川に戻してやることのできるわけですので、今後を十分に見て行きたいと考えています。幸いなことに、昨年 11 月に飼育を開始してからまだ 1 個体のみ死亡にとどまっていますので、このままのペースで行きたいものです。しかし、生き物のことですし、人間の管理することですから難しい面もあります。

アナグマ参上!?

まだ明るい夕刻の出来事だった。電話中にふと窓の外を動物が歩いているのが目に入りました。電話の相手にはちょっと待って下さいと言ってデジカメをつかんで飛び出した。コンポストの蓋を開けっ放しにしていたのがアナグマを誘ったのかもしれないが、人の気配の無いハンザキ研ではあるが堂々と歩いているのには感心した。まったくこちらに気づく事もなく餌を探している様子である。至近距離まで近づくとやっと逃げ出してレンタルのトイレと壁の間に逃げこんだ。とりあえずシャッターを押しては少しずつ近づくと相手も近寄ってくる。少々怖くなったのでシッ!と言うと気が付いたのか校庭を横切って逃げていったがその後姿もユーモラスだった(写真参照)。

アナグマは目が良く見えないのだという話を聞いたが、正にそのとおりの様子であった。本種は昔からタヌキと混同されることが多く、「タヌキ汁」の中身はアナグマだそうである。タヌキは肉が臭いので敬遠されているようだが、姫路市立水族館の飼育係が弁当のおかずでタヌキの肉を持ってきていて、おすそ分けしてもらい試食したが、そんなにきつい匂いではなかった。また、揖保川の主と尊敬していた易っさんはタヌキ取りの名人でもあり沢山のタヌキをトラバサミでゲットしていた。剥製にして稼いでいたようだが、肉は食用にし、「タヌキの肝」と称して胆嚢を乾燥させたものを万能薬として常備していた。全ての病はこれで治るのだと称していたのだが、お前も呑めと言われたのには閉口した。ハンザキ研の前の道路だけでも多くの動物が「ロードキル」の主役になっている。タヌキも例外でなく、ライトに立ちすくむ為か犠牲になることが多いようだ。

私もオオサンショウウオの夜間調査中に藪からガサゴソと出てきたタヌキと睨めっこになったことがあったが、こちらもドキッとしたもののタヌキの方も立ちすくんでいたので、しばらくして再び藪の中に姿を消した。道路わきでタヌキの骨格標本を幾つか収容したが、生々しい標本が道の真ん中に転がっていたので、棒で動かしてみると無数のシデムシ類などが食事中なので、後で骨だけ頂こうと考えて道路わきに移動しておいた。数日後に見に行くとまったく痕跡も無く見事に消えていた。清掃係は沢山いるのだと合点した。



アナグマのうしろ姿



タヌキのロードキル



写真1 節穴のようなアナグマの目玉



写真2 ハンザギの健康診断



写真3 運び込まれた中国ハンザギを見つめる



写真4 早速のバトル



写真5 中国ハンザギはニヒル?



写真6 なかなか活発な中国ハンザギ

ハンザキ研日誌

2008年7月

- 1日 兵庫県豊岡土木事務所来所（出石川のハンザキの件で）
- 3日 兵庫県八鹿土木事務所・大屋小学校来所（見学会の打ち合わせ）
- 4日 オオサンショウウオの会・実行委員会開催
- 7日 神河町立南小田小学校1年生2名・2年生8名教師3名来所
- 8日 奥銀谷小学校2～4年生20名来所
竹原野のオオサンショウウオ健康診断実施
- 9日 京都大学・松井研が中国ハンザキ6個体搬入、京都の賀茂川の外来生物として
- 10日 但馬県民局谷口局長他来所
- 11日 出石川のオオサンショウウオのツボカビ症、問題なしとの結論
268回調査終了（6月13日～）
- 15日 269回目の調査開始（27日まで）
- 16日 広島市安佐動物公園・足利氏他来所・中国ハンザキ2個体搬出
養父市立大屋小学校44名来所
- 17日 竹原野のオオサンショウウオ1個体死亡（初死亡）
兵庫県柏原土木事務所・藤井所長他来所
丹波市・渡部氏来所
- 19日 第一回オオサンショウウオ観察会実施、約40名参加
アンコ淵に24時間観察カメラ設置
- 22日 滋賀県立大学（院）馬場孝さん実験に来所
- 23日 ミニ・アクアリウムにクーラー設置
- 25日 市川水系流域委員会、県姫路総合庁舎にて
- 29日 県文化財保護審議会、兵庫県公館にて
- 30日 270回目の調査（8月15日まで）

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

ハンザキが外来生物の仲間入りになるとは思ってもいなかったが、中国ハンザキの件は大変なことだ。そもそも今から30数年前に日中国交が回復された時に、いち早く食うことを考えた人がいたのだ。マスコミに叩かれてこっそり川に捨てた例が賀茂川で多かったのだろう。中国ハンザキは皇居のお堀や埼玉県、徳島県などでも発見されているが、繁殖や交雑の報告は無い。ないと言うよりも何も調査が行われていないということだろう。賀茂川では繁殖も確認されているが日本のハンザキとの交雑もあるという。野外で大きなハンザキを発見しても日本産のものと決め付けしないで、きちんと調べてもらうことが必要だ。
(この印刷物はセブン-イレブンみどりの基金の助成をうけて作成しています)